

令和元年6月27日現在

機関番号：34302

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K21528

研究課題名(和文) 交換的正義論の系譜とポスト・アナキズム政治哲学の批判的接合

研究課題名(英文) Genealogy of Commutative Justice and Postanarchism

研究代表者

伊多波 宗周 (ITABA, Munechika)

京都外国語大学・外国語学部・講師

研究者番号：80608688

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究には三つの成果がある。まず、西洋哲学史において交換的正義概念がどのように捉えられてきたかを研究し、それが近代社会思想においてどのように応用されたかを明らかにした。第二に、相互性について考察し、共同性との関係を明らかにした。そして最後に、英語圏における新しいアナキズム(ポストアナキズム)が、かつてのアナキズムを本質主義とみなすことを批判した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、正義に関し、配分的正義の議論に偏りがちである議論状況にあって、その対概念である交換的正義概念が西洋哲学史においてどのように捉えられてきたかを研究することで、そうした状況を相対化しようとしたことにある。また、それを最新の政治哲学上の立場の一つであるポストアナキズムの考えを批判的に捉えることと接合しようとしたことにも意義があると考えられる。
社会的意義は、そうした相対化と接合により、人間社会および、そこでの正義のありかたについての新しい視角を提示する準備作業ができたことにある。

研究成果の概要(英文)：This research project has three achievements. First, I studied how the concept of Commutative Justice was understood in the history of Western philosophy, and clarified how it was applied in modern social philosophy. Secondly, I considered the idea of Reciprocity and clarified the relationship with the idea of Community. Lastly, I criticized the new anarchism (Postanarchism) which regards the classical anarchism as essentialism.

研究分野：哲学

キーワード：哲学 社会思想 交換的正義 相互性 ポストアナキズム プルードン

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1)フランスの社会思想家ピエール＝ジョゼフ・ブルードン(1809-1865)についての文献研究を本研究開始より前から進めてきた。ブルードン研究は、今世紀初頭よりフランスを中心に第三次隆盛期を迎えており、半世紀前の第二次隆盛期になされた解釈が更新されてきている。だが、第二次隆盛期において軽視された著作の一つであった『19世紀における革命の一般理念』(1851)で「配分的正義から交換的正義へ」という理念の哲学・思想史的意義については十分に論じられてきていなかった。そこで、本研究課題において、アリストテレス以来の交換的正義概念および、相互性概念の概念史を研究し、ブルードン思想の哲学・思想史的意義がどこにあったのかを明らかにしようと考えた。

(2)上述の背景が、ブルードン以前に関するものであるのに対し、もう一つの背景は、ブルードン以後に関するものである。日本においてはほとんど紹介されていないが、前世紀末以降、「フレンチ・セオリー」受容後の英語圏において、「ポストアナキズム」(あるいは、ポスト構造主義アナキズム)と呼ばれる政治哲学上の思潮が生まれている。狭義にはソール・ニューマンを中心とした数名の研究者を指すが、デヴィッド・グレーバーを含め、ポスト構造主義以降にアナキズムを研究・主張する一群の思想にも、一部共通した傾向を見ることができる。本研究課題では、これら新しいアナキズムが、(1)で示したような交換的正義・相互性の概念史とどのような関係にあるのかを、ブルードンを媒介として明らかにしようと考えた。

2. 研究の目的

(1)上述の背景(1)にもとづき、西洋哲学史における交換的正義概念の系譜をたどり、そこで何が問題とされてきたかを明らかにすることを一つの目的とした。交換的正義概念は、基本的に配分的正義概念と対のものとして使用されてきた。後者は、全体からの配分を旨とするために、ある時代以降、多くの場合、超越頂(権力)と人々との垂直的な関係性における正義として捉えられるようになる。20世紀の福祉国家を支えた思想をはじめ、近現代の多くの正義論は、配分の公正さを問題にする。そうした歴史の中で、水平的な交換関係における超越頂なき正義、全体なき部分と部分の正義を根幹に据えた社会像を構想した思想家の代表がブルードンである。だが、その構想は、西洋哲学史における分厚い議論の蓄積なしにはありえなかった。交換的正義概念(と配分的正義概念)がどのような意味を担ってきたかを探ることが、ブルードン思想の正義論の位置づけと意義を明らかにするうえで不可欠であると考えた。そのため、当該の目的のための具体的な作業として、アリストテレス、トマス・アクィナス、グロティウス、ホッブズ、スミスを中心に、交換的正義概念の系譜を探るという目的を設定した。

(2)研究開始時点では明確な目的として設定してはいなかったが、上述の目的を達成するため、事柄として(哲学的に考えて)人間同士の交換関係、より広く相互的關係において何が行われているのかについて、一定の見解を示す必要性が生じた。それは、交換的正義について論じる哲学者たちが想定しているものが、交換、応報、慈善等、多様なニュアンスを含んでおり、事柄としての理解が先立たなければ、概念史の適切な整理が行えないと考えたからである。そうして、相互性とは何かについて哲学的考察を行うことが、第一の目的を支える第二の目的となった。

(3)上述の背景(2)にもとづき、第三の目的として、ポストアナキズムの思潮の特徴と論理構造を解明、アナキズム思想の歴史における意義を明らかにすることを設定した。近年、ヴィヴィアン・ガルシアをはじめ、英語圏のポストアナキズムに対してフランスからの批判的応答も行われている(もちろん、英語圏内でのアナキズム研究者からの批判もある)。そこでポイントとなるのは、ポストアナキズムが19世紀的アナキズムを本質主義的であると批判することの正当性である。ブルードンが本質主義的な立場、とりわけ、ヘーゲル左派的な人間主義を批判することで自身の社会思想を展開したという見通しを過去の研究で得ている。その見通しを本研究で精緻化したうえで、19世紀的アナキズムの複数性を視野に入れてポストアナキズムの何が新しいのかを論じようと考えた。

3. 研究の方法

(1)上述の目的(1)について、おおむね、古代、中世、近世、近代の4区分にしたがって、最重要のテキストを中心に読解し、そこで問題とされているものの輪郭をつかみ、そのほかのテキストおよび代表的な研究書をも参照しつつ、テキスト解釈上の正当性を争うというより、のちの時代の視点から見て、どのような意義があったのか(読解におけるバイアスをも含めて)を論じるという方法をとった。

(2)上述の目的(2)について、相互性について論じた哲学・思想の代表的テキストを読解したうえで、それが共同性概念とどのような関係に置かれているかを分析し、相互性に固有の領域は何なのかを探るという方法をとった。その際、上述の目的(3)における成果に直接的な効果が生じるようにするべく、19世紀的アナキズムに見られる相互扶助論を批判的考察の対象として含めた。

(3)上述の目的(3)について、ポストアナキズムおよび同時代のアナキズム文献を網羅的に読解し、その諸相を整理したうえで、上述の目的(1)および目的(2)に関する成果を踏まえて、その位置付けを明確にし、批判的に接合するという方針をとった。

4. 研究成果

(1)上述の目的(1)について、三本の論文を成果として発表した。執筆順ではなく、対象としたテュクストの年代順にそれら成果について説明する。まず、「交換的正義概念の系譜におけるアリストテレスと問いの源泉」において、アリストテレス『ニコマコス倫理学』第5巻で論じられる部分的正義の議論を中心に、交換的正義概念をめぐる問いの源泉を探った。アリストテレスは、部分的正義を配分的正義と矯正的正義の二つであると述べ、それらについての議論ののちに、応報(いわゆる交換的正義)の議論を置いた。この位置付けをめくり、論争が繰り広げられてきたが、どのような問いの構造の中で、これらの正義が論じられているかを明らかにした。次に、「交換的正義概念の系譜におけるキケロとトマスの影響力」において、トマス・アクィナスが『神学大全』II-2で展開した議論を中心に、キケロの信義論をも扱い、それらが後世の正義論に対してもった大きな影響について論じた。トマスにおいて、部分的正義(特殊的正義)が明確に二分化されて、全体の部分に対するものとしての配分的正義と、部分の部分に対するものとしての交換的正義という対が生まれることになる。また、キケロは、近世近代に問題になり続ける慈善と正義の区分について論じている。これらの哲学的意義を考察した。なお、未発表であるが、これら二つの論文を踏まえ、グロティウス、ホッブズ、スミスの位置付けについても考察し、現在成果発表準備中である。それから、「ブルードンと社会契約論」において、目的(1)に記したブルードンの思想的意義の一部について、いわゆる社会契約論と別様の契約の思想を展開したものであるという観点から論じた。その中で、トマスの「部分の部分に対するもの」という発想が、ブルードンの中でどう処理されたのかを中心的に論じた。後期になるにつれ、ブルードンは「部分」(個別者)は個人にかぎられないという発想を全面化していくことになることを明らかにした。

(2)上述の目的(2)について、2本の論文を成果として発表した(うち一つは、著書の分担執筆の形式)。まず、「相互性・社会性と秩序変化」において、日本の哲学者松永澄夫の社会哲学上の議論を踏まえて、相互性と社会性との関連、それらがいかんにして社会秩序の変化と関係するかについて論じた。次に、「相互性について」においては、相互性の延長上に共同性はなく、その逆もまた然りということについてのテーゼを提示した。その議論の中で、19世紀的アナキズムの一つの代表と言えるクロボトキンの議論をとりあげ、クロボトキンが述べる「相互扶助」とは、近代国家とは別様の「共同性」のことであるという解釈を与えた(上述、方法(2)参照のこと)。

(3)上述の目的(3)について、1本の論文、1本の学会発表、1本の書評を部分的な成果として発表した。まず、「反神論と「別の必然性」」においては、ポストアナキズムが19世紀的アナキズムの特徴として挙げる「本質主義」が、ブルードンにおいては、ほぼまったく当たらないということを、前期代表著作を論じる形で明らかにした。次に、発表「フランス哲学・社会思想における責任概念」において、フランス社会思想の特異性を紹介するなかで、それが、たんなる本質主義的な立場をとることがありえないこと、社会構想に入る人為性のニュアンスと、責任概念との結びつきが重要であることを指摘した。最後に、書評「森元斎著『アナキズム入門』」において、ポストアナキズムを中心とした近年のアナキズムをめぐる動向について紹介し、そこで本質主義批判が問題になっていること、そのことから照射して、書評対象の著書がどのように読めるかを考察した。なお、方法(3)で書いた、網羅的な読解については、研究期間内にほぼ完了し、ノート化した。ただ、当初計画よりも必要な作業量が増えたため、最終的な成果発表にはいたっておらず、近い将来に行う必要があると考えている(なお、その題目として、「ポストアナキズムの諸相と19世紀的アナキズムの忘却された諸要素」を考えている)。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計5件)

伊多波宗周、相互性について、ひとおもい、査読有、創刊号、2019、159-179

伊多波宗周、交換的正義概念の系譜におけるキケロとトマスの影響力、研究論叢、査読有、92号、2019、13-34

伊多波宗周、ブルードンと社会契約論、フランス哲学・思想研究、査読有、23号、2018、116-127

伊多波宗周、交換的正義概念の系譜におけるアリストテレスと問いの源泉、研究論叢、査読有、90号、2018、33-54

伊多波宗周、反神論と「別の必然性」-ブルードン『経済的諸矛盾の体系』における社会変化の倫理-、倫理学年報、査読有、66号、2017、66-99

〔学会発表〕(計1件)

伊多波宗周、フランス哲学・社会思想における責任概念、国立研究開発法人科学技術振興

機構社会技術研究開発センター委託事業「人と情報のエコシステム」研究開発領域 プロジェクト企画調査「高度情報社会における責任概念の策定」(RSIS)第5回公開研究会「責任・知能・労働」、2017

〔図書〕(計1件)

松永澄夫監修 渡辺誠・木田直人編集、哲学すること、中央公論新社、2017、pp.700 (伊多波宗周「相互性・社会性と秩序変化」15-39)

〔その他〕

(書評)伊多波宗周、森元斎著『アナキズム入門』、フランス哲学・思想研究、23号、2018、350-353

6. 研究組織

研究代表者のみで研究を遂行した。

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。